

「Blind Touch」

—2 稿—

2025/7/15
雨森 れに

〈人物表〉

佐藤 ともこ

(14) 家庭内暴力を受けている中学生

村山 義人

(28) 売春を斡旋している

安田 隆俊

(37) ともこの客

(24) 弱視。体を売って生活している

1. 10年前・ともこの家・室内（夜）

長屋式のアパート。電気はついていない。
窓際で怯えた様子の佐藤ともこ（14）。
大粒の涙を流しており、体中に痣や怪我がある。
窓にガラスの灰皿が当たり、破片が飛び散る。
血が数滴、床に落ちる。
ともこが目を手で覆っている。

2. 歌舞伎町・大久保公園横（夜）

ガラスの割れる音。浮浪者が酒瓶を割って残念そうにしている。
マスクとサングラスをかけ、顔が一切見えない佐藤ともこ（24）。
音に対し、びくりと反応する。
サングラス越しに、浮浪者の様子を盗み見る。
彼女は弱視であり、なんとか危険の有無を凶ろうと
しているのである。

買春目的の男がともこに近づく。

男 「顔見せてよ」

ともこ 「あっ」

男がサングラスを取り上げる。

ともこの眠たそうな目が露になる。

男 「うっわ。クソブスじゃん。無理だわ」

男はサングラスをその場に捨て、去る。

ともこはサングラスを拾おうとする。目の前にある
が、光が足りずうまく拾えない。

サングラスを拾う村山義人（28）。

村山 「このグラサン、でかくない？」

ともこ 「あ、それ私の……」

村山 「知ってる。これ、身バレ防止？」

ともこ 「身バレっていうか、顔バレかな」

村山 「なに、有名人？」

ともこ 「お客取るのに、顔が邪魔でさ」

ともこがマスクをずらして、顔を見せる。

ともこ「わかるでしょ？」

村山、にやりと笑って、

村山 「客に困ってるんだ」

ともこ「うん。もうスマホも止まりそう」

村山 「じゃあ、俺んとこ来なよ」

村山がサングラスを、ともこの手に乗せる。

3. 村山の家・室内（夜）

高級マンションの一室。

ベッドには、ともこと村山。裸で寝転がっている。

ともこ「顔、触らせて」

村山 「いいけど。なんで？」

ともこ「指で、顔見れるから」

ともこが、村山の顔を触り始める。

指は瞼をなぞり、鼻筋へ。

ともこ「全然違う。きつと、こういうのが美人なんだよね」

村山 「違うほうが相性いいんですよ。遺伝子どーのこーので」

村山はともこの手を取る。

村山 「モコちゃんの顔もかわいいよ」

村山が、ともこの手を、ともこの顔へ誘導する。

ともこ「公園でクソブスって言われたばっかだけけど」

村山 「自信もって。ほっぺは丸いしき。鼻はアップノーズが流

行りじゃん？ 唇も小さくて小動物みたいだし」

村山はともこの指を頬、鼻、唇と触らせていく。

村山 「俺の中で美人はこういうかんじ。わかった？」

ともこ「(微笑んで)嘘ばっか」

村山がともこの頭を撫でる。

ともこは心地よさそうに眠り始める。

4. ビジネスホテル・廊下（夜）

翌日。古いビジネスホテル。ともこは壁に寄りかかっている。マスクはしておらずサングラスだけしている。

村山は部屋の中の男、安田隆俊（37）と交渉中。

村山 「モコちゃん、おいで」

ともこは部屋の前に行き、深く頭を下げる。

安田は、ともこの手を取り部屋の中へ。

5. ビジネスホテル・部屋・室内（夜）

シャワーの音。ベッド周りに衣服が散らかっている。

ともこはバスローブ姿でベッドに腰掛けている。

サイドテーブルの上に2万円が置いてある。

指で2万円があることを確認するが、そのままにす

る。

立ち上がり、衣服を探し始める。

ひとつ見つけては広げて確認する。

男性物は丁寧に畳み、自分のものはすぐに身に着ける。

安田がシャワーから出てくる。

安田 「（驚いて）どうしたの。お金の場所わからなかった？」

安田、服が畳まれていることに気づく。

ともこ「ちゃんと挨拶してからって思ってた」

ともこが微笑む。

安田は財布から1万円を出し、2万円と合わせてと

もこに渡す。

安田 「これ」

ともこは、おずおずと紙幣の認識マークを触る。

ともこ「こんなに、いいんですか……」

安田 「服、畳んでくれてありがとうね」

ともこ「すみません。こんなことしかできなくて……」

安田が、ともこの肩を優しく叩く。

安田 「嬉しかったよ。また、呼ぶね」

ともこ「ありがとうございます。本当に、ありがとうございます」

ともこが3万円を握りしめる。

6. 花園神社（夜）

村山、裏参道でスマホをいじっている。

ともこがそこに合流する。とても嬉しそうな顔をし

ている。

2万を村山に押し付けて、

ともこ「言う通りにしたら、すごい稼げた」

村山「みんな偽善者だからね」

ともこ「同情ってこと?」

村山「その価値があるってこと」

村山はともこから貰った2万のうち1万を返す。

村山「これは初仕事のお祝い。今日はいいい部屋で寝れるね」

ともこ「え?」

村山はともこの頭を撫で、去ろうとする。

ともこは焦って、

ともこ「一緒に帰るんじゃないの?」

村山は無言でともここと向き合っている。

ともこ「一緒に、いられないの……?」

村山「仕事の連絡は、LINEでいい?」

ともこが戸惑う。

村山「ちゃんとビジネスって割り切ろうよ」

村山がともこの鼻先をつつく。

村山「また明日、連絡するね」

村山が去っていく。

7.

歌舞伎町・靖国通り（夜）

ネオンが輝く中、ともこがフラフラと歩いている。

区役所通りの横断歩道で赤信号に気付かない。

車と接触しそうになる。

安田がともこの腕を引っ張る。

安田「大丈夫?」

ともこ「え、あ、ありがとうございます」

安田「……モコちゃん、だったよね」

ともこはサングラス越しに男の顔を眺める。だが、

誰かわからない。

安田「いいよ。こっちおいで」

噴水横の階段。黒人や酔っ払いがたむろっている。

安田は、ともこを階段に座らせる。

安田 「家は？」

ともこ 「どっかネカフエに……」

安田 「……親御さんは？」

ともこが首を振る。

安田 「そっか。嫌じゃなかったら——うちに来る？」

ともこ 「仕事ですか？」

安田 「そうじゃないけど……」

ともこがサングラスを取る。

ともこ 「同情ですか」

安田は何も言えなくなる。

ともこ 「ね、お願い。顔、触らせて」

安田は戸惑いながら、ともこの手を自分の顔へ導く。

ともこの指が安田の瞼をなぞる。

ともこ 「私と同じぐらい重たくて」

次に鼻、頬と触る。

ともこ 「なだらかで、しっとりしてる」

安田は困ったように微笑む。

ともこの指が安田の唇を触る。

ともこ 「笑ってくれてるの？」

黒人が喧嘩を始め、ひとりが飲んでいたビール瓶を

地面に叩きつける。

安田、とっさにともこを庇う。

安田 「あつぶないな……モコちゃん、大丈夫？」

ともこは戸惑いの表情を浮かべる。

だが、徐々に泣き顔へ変わっていく。

ともこは安田にすがりつく。

安田は躊躇しながら、ともこの背中を撫でる。

ビルの隙間から覗く空は、白み始めている。